

Title	「まれに」とrarementの対照研究(2)
Sub Title	Etude contrastive de "mareni" et de "rarement" (2)
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.40 (2005. 3) ,p.93- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20050331-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「まれに」と rarement の対照研究 (2)

喜 田 浩 平

はじめに

本紀要 39 号掲載の『「まれに」と rarement の対照研究 (1)』(以下、『対照研究 (1)』と略記)では、「まれに」と rarement は低い頻度を表す点で共通しているが両者の「方向性」が異なることを主張した。具体的には、「まれに」の方向性が肯定的であるのに対し rarement の方向性は否定的であるとの仮説を立て、その傍証と考えられるデータを提示した。その結果、「まれに」を rarement と訳すことは不適切であり、むしろ parfois や de temps en temps などの肯定的方向性を持つ表現を使う方が望ましいという結論に至った。ただし、「(～は) まれだ」という述語的用法の方向性は否定的であることを示唆し、その一方で「まれ」そのものの方向性を限定することが困難であることにも触れた。

ところで、実際には「まれに」を rarement と訳すケースが少なからず存在する。以下ではそのいくつかを取り上げ、一つ一つ詳しく分析してみたい。これらは全て一見すると反例のようであるが、実は『対照研究 (1)』の主張と矛盾するものではないことを示したい。

1. 大河童の体重

まず、次の例を比較されたい。日本語テキストの「まれに」の部分を下線で示し、フランス語テキストの rarement を太字で強調した。(日本語テキストの漢字、仮名づかいは現代風に改めた。以下同様。)

(1) 僕はこの先を話す前にちょっと河童と云うものを説明して置かな

ければなりません。河童は未だに実在するかどうかも疑問になっている動物です。が、それは僕自身が彼等の間に住んでいた以上、少しも疑う余地はない筈です。では又どう云う動物かと云えば、頭に短い毛があるのは勿論、手足に水掻きのついていることも「水虎考略」などに出ているのと著しい違いはありません。体重は医者者のチャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、——稀には五十何ポンドぐらいの大河童もいると言っていました。(芥川龍之介、「河童」、『芥川龍之介全集』、第14巻、岩波書店、1996、p.109。)

- (2) Avant de continuer, il me reste à expliquer brièvement ce qu'est le kappa : un animal dont on met encore en question l'existence même. Mais ce doute est désormais exclu, puisque j'ai séjourné parmi eux. Alors de quelle sorte d'animal s'agit-il? Les poils courts de sa tête, non plus que ses mains et ses pieds palmés, ne s'éloignent tellement de ce qui est décrit dans le *Suiko kôryaku*. Sa taille ne dépasse pas un mètre. Son poids, selon le docteur Chak, varie entre vingt et trente livres : il arrive, bien que **rarement**, dit-il encore, qu'on rencontre de gros kappa dont le poids atteigne une cinquantaine de livres. (Akutagawa Ryunosuke, «Les Kappa», in Akutagawa Ryunosuke, *Rashomon et autres contes*, traduit par Arimasa Mori, traduction relue par François Toussaint, Gallimard, coll. «connaissance de l'Orient», 1965, p.239–240.)

一見すると、確かに「稀に」が *rarement* で訳されているように見える例である。しかしよく観察してみると、「稀に」と *rarement* が一対一で対応しているのではないことが分かる。実際に対応しているのは、「稀には五十何ポンドぐらいの大河童もいると言っていました」と “il arrive, bien que *rarement*, dit-il encore, qu'on rencontre de gros kappa dont le poids atteigne une cinquantaine de livres” の部分である。「と言っていました」とその対応

箇所は考慮に入れないとすると、日仏両テキストで比較すべきは以下のような文である。

- (3) 稀には五十何ポンドぐらいの大河童もいる
- (4) il arrive, bien que rarement, qu'on rencontre de gros kappa dont le poids atteinne une cinquantaine de livres

ここで注目したいのは、(3) と (4) それぞれの全体的な方向性である。「稀に」と rarement という単語レベルには囚われずに、(3) と (4) のそれぞれを全体的に観察すると、両者とも肯定的方向性を持っているように感じられるのではないだろうか。(3) は全体としては、「五十何ポンドぐらいの大河童がいる」ということを主張している。また (4) も全体としては「que 以下の部分で述べられていることがあり得る」ということに帰着する。この限りにおいて、(3) の翻訳として (4) が適切であることは間違いない。

では、この全体的方向性と「稀に」および rarement の関係について考察してみよう。まず、一般に「まれに」を含む文の方向性は肯定的であることは『対照研究(1)』で既に指摘したことであり、驚くには値しない。したがって(3)に関しては取り立てて問題にすべき点はない。問題は(4)の方である。『対照研究(1)』では、rarement を含む文の方向性は否定的であると主張した。この主張を撤回することなく、(4) が rarement を含みながらも全体の方向性が肯定的であることを説明しなければならない。

ところで、注目すべきは rarement が bien que とともに使われている点である。伝統文法の用語を使うならば、(4) の il arrive... の部分は「主節」であり、bien que... は「従属節」である。この従属節の中に rarement が挿入される形になっている。ここで次の仮説を検討しよう。

[仮説 1] 主節と従属節 bien que X からなる文では、X の方向性はキャンセルされ、主節の方向性が文全体の方向性を決定する。

この仮説の妥当性は、René Rivara がすでに説得力ある形で論証している¹⁾ので、その要点を紹介しておこう。bien que による従属節の性質について、mais との比較を通じて考えてみる。A mais B と Bien que A, B は意味的に近く、一方を他方で書き換えても大きな違いはない場合が多い（ただし Bien que A では A を接続法にする必要がある）。しかし両者には決定的な違いがある。mais を含む文を全体として観察する場合、mais の後に来る要素の持つ方向性が最終的な方向性として認識されるのである。従って A mais B 全体の方向性は B そのものの方向性と一致する。その結果、もし A と B を入れ替えて B mais A にすると今度は A の方向性が B mais A 全体の方向性と一致することになる。そのため、A mais B と B mais A では全く意味が異なる。一方、Bien que A, B ではその全体の方向性は B そのものの方向性と一致するが、Bien que A と B の語順を逆にして B, bien que A とした場合でも方向性の観点からは大きな違いはなく、B の方向性が B, bien que A 全体の方向性と一致する。

念のため (4) とは異なる例でこの点を確認しておこう。(4) とできるだけ構造の似ている例の中から主節の方向性が識別しやすいものを探してみると、次のようなものが見つかった。

(5) Pourquoi des cupules parfois convexes ?

Il arrive parfois (bien que rarement) que les fentes dessinent un pavage “convexe”, comme sur la photographie prise dans la vallée de la Mort (*image en survol*). Plusieurs causes peuvent engendrer cette forme atypique. Par exemple, [...].

(<http://www.ens-lyon.fr/Planet-Terre/Hebdo/Images/pages/Img-16-2003.html> より引用)

地質学的知見についての啓蒙的サイトからの引用である。古代に地面が乾燥し、亀甲のような溝が形成され現在まで残存しているという現象を説明している。通常はこの溝は六角形で、溝に囲まれる部分は凹面状である。この

現象について、「なぜ溝ができるのか」「なぜ六角形なのか」「なぜ凹面なのか」という問題が列挙され、それぞれについて解説が続いている。引用部分は最後の問題とその説明である。

引用の一行目は当該の問題を質問形式で提示したものである。その趣旨は、溝に囲まれる部分 (*cupule*) は多くの場合凹面だが、時として凸面 (*convexe*) であることもあるがそれは何故なのかということである。その理由の説明は三行目の後半、“*Plusieurs causes*” から始まり、“*Par exemple*” 以降でその理由 (大別して二つ) が述べられる。

では、引用の二行目の最初から三行目の途中までは、どのような性格を持つ文であろうか。これはおそらく、冒頭で提起される問題の内容を言い換えたものだと思う。換言すると、“*Pourquoi...*” と “*Il arrive...*” は、疑問文か平叙文かの違いはあるが同じ内容を表し、一種のパラフレーズの関係にあると解釈できる。ところで疑問文の内容は、「溝に囲まれた部分がしばしば凸面状である」ということを前提としている。これを Q としよう。一方、二行目以降の文は次のように分解できる。(i) “*Il arrive parfois...que...*” が主節で、方向性は肯定的。(ii) *bien que rarement* は従属節で、方向性は否定的。(iii) *que* 以下の部分は「凸面状、云々」ということを述べている。以上三つの要素を組み合わせ、これが冒頭の疑問文の前提 Q と同じ内容を表すためには、主節の持つ方向性が文全体の方向性として解釈される必要がある。つまり、仮説 1 から予測される通りの意味構築が行われることが確認できる。

以上で (1) と (2) の比較が提起する問題は解決したが、ここでさらに一步踏み込んで、より一般的な観点からこの問題を検討してみたい。仮説 1 はあくまでも *bien que* による従属節に限定したものであったが、より一般的な次の仮説は成立するだろうか。

[仮説 1'] ある文が主節と従属節から構成される場合、従属節に含まれる表現の方向性はキャンセルされ、主節の持つ方向性が文全体の方向性を決定する。

仮説 1' の傍証として、次の事実を指摘したい。本稿の筆者は、si A, B という形式で「もし A ならば B」と解釈できる文を「条件文」と呼び、その様々な用法を「方向性」の観点から分析したことがある²⁾。その結果、四つのパターンに分類できることを主張した。その中の一つに、次のような用例がある。Pierre viendra という発話が Je vais lui préparer un repas という主張を正当化できるような状況を想像してみる。そして全く同じ状況で、次のように発話されたとしたらどうだろうか。

(6) S'il fait beau, Pierre viendra.

(6) も同様に Je vais lui préparer un repas を正当化することになるのではないだろうか。この観察が正しいとすると、(6) の S'il fait beau の部分は (6) 全体の方向性にあまり関与せず、主節の方向性が全体の方向性を決定していると言えるのではないだろうか。ただし S'il fait beau が全く無意味というわけではなく、おそらく主節の方向性を緩和する働きを持つのではないかと考えられるが、この点についてはこれ以上触れないことにする。

また、条件文の全てが同じ働きをするとは限らないということを付け加えておきたい。(6) のようなケース以外にもいくつかのパターンが観察され、例えば Si tu mets la table, tu auras un bonbon のような条件文は、ある状況では tu devrais mettre la table のような主張を裏付ける論拠となり得る。この場合、従属節が全く関与しないとは言い難い。また、Si je bois du lait, je suis malade が例えば je suis allergique au lait に方向付けられることがあるが、この場合は主節と従属節の両方が全体的に作用していると言うべきであろう。従って、仮説 1' はこのままの形では強すぎるので、若干の修正が必要である。

2. フランスのピアノ作品

次の例もまた、一見すると『対照研究 (1)』の主張と矛盾するように思われる。

- (7) ある秋仏蘭西から来た年若い洋琴家がその国の伝統的な技巧で豊富な数の楽曲を冬にかけて演奏して行ったことがあった。そのなかには独逸の古典的な曲目もあったが、これまで噂ばかりで稀にしか聴けなかった多くの仏蘭西系統の作品が齎らされていた。(梶井基次郎、「器乐的幻想」、『梶井基次郎全集』、第1巻、筑摩書房、1999、p.194。)
- (8) Durant tout un automne, jusqu'à l'hiver, un jeune pianiste français interpréta un grand nombre d'œuvres avec la virtuosité des artistes de ce pays. Il exécuta un programme traditionnel de musique allemande, mais aussi, de nombreuses pièces du répertoire français simplement connues de réputation jusqu'alors et **rarement** entendues (Kajii Motojirô, «Hallucinations instrumentales», in *Les cercles d'un regard : le monde de Kajii Motojirô*, traduction et commentaires de Christine Komada de Larroche, Maisonneuve et Larose, 1987, p.101.)

確かに、「稀に」の訳として *rarement* が使われている。この事実をどのように理解すればよいだろうか。

まずここで注目すべきは、「稀に」と *rarement* が一対一対応するわけではなく、対応関係にあるのは「稀にしか聴けなかった」と “*rarement entendues*” であるという事実である。そしてそれぞれを全体的に解釈して比較すると、両者とも否定的方向性を持っており、翻訳としては全く問題ない。フランス語訳の *rarement* が否定的方向性を持つことは『対照研究(1)』で指摘した通りであるから、問題なのは日本語テキストの方である。本来は肯定的方向性を持つはずの「まれに」が、どうして否定的方向性を持つのだろうか。

そこでもう一度日本語テキストをよく見てみると、「稀に」が「～しか～ない」という表現とともに使われていることに気づく。ここに何か要因があるのではないかと推測される。そこで次のような仮説を立ててみよう。

〔仮説2〕 Xが肯定的方向性を持つ場合、「Xしか～ない」全体の方向性は肯定的になる。

『対照研究(1)』で使用した例を応用してこの仮説を検証してみよう。「時々」と「たまに」を取り上げる。これらがどのような方向性を持つ表現であるか確認するために、次のような実験をしてみよう。ある薬の使用について、医者が患者に副作用のリスクについて説明する状況を想像してみる。特別な理由(副作用によって自殺する、etc.)がない限り、常識的な判断のできる医者の発言としては、次のようなものが適切であろう。

- (9) 副作用が出ますので、気を付けてください
- (10) 副作用が出ませんので、安心してください

さて、「副作用が出ます」に「時々」や「たまに」を挿入する場合、どのような影響が出るだろうか。(9)や(10)と同じ状況で発話されると仮定して、次の発言を観察してみよう。

- (11) 副作用が時々出ますので、気を付けてください
- (12) 副作用がたまに出ますので、気を付けてください

特に違和感はない。一方、同じ状況で次のような発言はどうだろうか。

- (13) 副作用が時々出ますので、安心してください
- (14) 副作用がたまに出ますので、安心してください

極めて不自然である。以上の観察から、「時々」と「たまに」は、「出ます」と同じ方向性、すなわち肯定的方向性を持つと結論できる。

では、「～しか～ない」と組み合わせるとどうなるだろうか。まず次の例を見てみよう。

- (15) 副作用が時々しか出ませんので、気を付けてください。
- (16) 副作用がたまにしか出ませんので、気を付けてください。

上記(9)や(10)と同じ状況では、不自然である。では次の例はどうだろうか。

- (17) 副作用が時々しか出ませんので、安心してください。
- (18) 副作用がたまにしか出ませんので、安心してください。

特に問題ない。ということは、(10)と比較すると分かるように、「時々しか出ません」と「たまにしか出ません」は「出ません」と同じ方向性、すなわち否定的方向性を持つものと考えられる。

以上の観察が正しいならば、「～しか～ない」の作用によって「時々」や「たまに」の持つ肯定的方向性が否定的なものに変更されたことになり、仮説2が裏付けられる。なお、仮説2は「時々」や「たまに」などの頻度表現以外にも、例えば数量表現（「少し」など）でも確認できる（「副作用が少し出る」は肯定的、「副作用が少ししか出ない」は否定的）。

3. 猫の耳

次の例の日本語テキストでも「まれに」が「～しか」と組み合わせられているが、フランス語の方が少し事情が異なる。なお、この例は『対照研究(1)』の最後の部分で課題として問題提起した例(22)(23)と全く同じものである。

- (19) そんな訳で耳を引っ張られることに関しては、猫は至って平気だ。それでは、圧迫に対してはどうかというと、これも指でつまむ位では、いくら強くしても痛がらない。さきほどの客のように抓って見たところで、極く稀にしか悲鳴を発しないのである。(梶井基次郎、「愛撫」、『梶井基次郎全集』、第1巻、筑摩書房、1999、p.202。)
- (20) C'est ce qui explique la totale indifférence des chats quand on tire leurs oreilles. Pincez-leur maintenant les oreilles entre vos doigts :

si fort que vous le fassiez, ils ne souffrent pas non plus. On a beau les pincer comme le visiteur de tout à l'heure, ils ne poussent que **rarement** un cri de douleur (Kajii Motojirô, «Caresses», *op. cit.*, p.111.)

日本語テキストとフランス語テキストで対応するのは、「極く稀にしか悲鳴を發しないのである」と“ils ne poussent que **rarement** un cri de douleur”の部分であろう。いずれも否定的方向性を持っている点で共通しており、翻訳としては問題ない。また、日本語テキストの「稀にしか悲鳴を發しない」が否定的方向性を持つことは仮説2から予想できることである。一方、フランス語訳では **rarement** が *ne...que* と共に使われているが、単独の **rarement** が否定的方向性を持つという事実から、*ne...que rarement* の全体が否定的方向性を持つことが予想できるだろうか。この問題がここでの主要な論点である。

この予測が可能であるためには、次の仮説が一般に成り立つことを示す必要がある。

[仮説3] X が否定的方向性を持つ場合、*ne...que X* という発話全体の方向性も否定的である。

この仮説を検証するために、次のような方法を取る。『対照研究(1)』で提案したように、フランス語の表現の方向性の認定には *même* のテストが有効である。表現 X の方向性を見るためには、X, *même Y* という連続を考え、Y の位置にどのような表現が入り得るか観察するのである。Y が肯定的ならば X の方向性も肯定的、Y が否定的ならば X の方向性も否定的である。ここで問題になっている *ne...que X* に関しては、*ne...que X, même Y* という形の発話を収集し、Y を観察することになる。

まず X が **rarement** の場合から始めよう。ネット上で検索すると、ほとんど全てが次のようなものばかりであった。

- (21) Les rêves prémonitoires peuvent être considérés comme tout à fait normaux. Simplement certaines personnes en feront plus souvent que d'autres qui **n'en feront que rarement** ou **même jamais**. (http://www.francelecture.net/courrier/esoterisme_24.htm)
- (22) Une attitude positive est essentielle pour vivre avec l'épilepsie et pour empêcher qu'elle n'en vienne à dominer toute votre vie. A la suite d'un traumatisme crânien important, l'épilepsie peut être traitée préventivement, elle peut **ne se déclencher que rarement** ou **même jamais**. (<http://www.traumacranien.org/ref/headway/TRAUMATISM%20CRANIEN%20ET%20EPILEPSIE.htm>)
- (23) Loin d'être un mouvement unifié et uniforme, le *Nouvel Âge* est au contraire un réseau fluide d'adeptes dont l'approche est de *penser globalement mais agir localement*. Ceux qui font partie de ce réseau ne se connaissent pas nécessairement entre eux et **ne se rencontrent que rarement**, ou **même jamais**. (http://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/interelg/documents/rc_pc_interelg_doc_20030203_new-age_fr.html)

ほぼ例外なく、même の後には jamais が続く。従って、ne...que rarement の方向性は否定的と結論できる。

では次に、X の位置に否定的方向性を持つ数量表現の代表例である peu が使われている例を見てみよう。

- (24) Certains attribuent le nom de marbre à des matériaux qui **ne contiennent que peu** ou **même souvent pas du tout de marbre**. (<http://www.dad.fr/Lesmarbres.htm>)

- (25) pour avoir au début négligé cette précaution, on a vu des mouches refluer là où il n’y en avait **que peu** ou **même pas du tout** auparavant. (<http://www.sleeping-sickness.com/lavier.htm>)
- (26) le nationalisme belge, ça n’existe **que peu** ou **même pas du tout**, sauf au tennis. (<http://www.francetv.fr/commun/forum/read.php?f=22&i=220&t=213>)
- (27) L’œuvre des six jours n’a **que peu**, ou **même rien** à faire avec la géologie. (<http://www.bibliquest.org/WK/WK-at01-Genese-01-11.htm>)
- (28) LaRouche a souligné que la raison de cette guerre à venir n’a **que peu** ou **même rien** à voir avec de « mauvaises actions », actuellement commises ou qui puissent l’être, par le dirigeant irakien Saddam Hussein. (http://solidariteetprogres.online.fr/News/Etats-Unis/breve_430.html)
- (29) A cette époque, lors des repas en commun, Bruno ne se mettait à table qu’une fois les autres rassasiés, en sorte qu’il **ne** lui restait souvent **que peu** ou **même rien** du tout à manger. (<http://www.bruno-groening.at/francais/mwf/buchauszug/revolution2.htm>)

ここに挙げた例では、pasであったり rienであったり、また場合によっては du tout で強調されることもあるが、いずれにせよ même の後は否定表現である。従って ne...que peu の方向性は否定的と結論できる。

以上の観察から、少なくとも rarement と peu に関しては仮説 3 は検証されたと言っていいだろう。そしてこの結論が正しいならば、(20) の “ils ne poussent que rarement un cri de douleur ” の方向性が全体としては否定

のであることは予測できることになる³⁾。

残された問題

以上の議論では、一見すると『対照研究 (1)』の主張に対する反例のようであっても実はうまく処理できるものばかりであった。四つの仮説をさらに検証する必要はあるが、基本的には問題ないものと思われる。

しかし、そう簡単には説明できない例もある。一つだけ紹介しよう。

(30) 砂——岩石の碎片の集合体。時として磁鉄鉱、錫石、まれに砂金等をふくむ。直径2～1/16m.m. (安部公房、「砂の女」、『安部公房全集』、第16巻、新潮社、1998、p.122。)

(31) SABLE — Agrégats de fins fragments de roche. Contient parfois du minerai de fer magnétique et de l'oxyde naturel d'étan ; plus **rarement** des paillettes d'or. Diamètre : de 2 mm. à 1/16^e de mm. (Abé Kôbô, *La femme des sables*, tr. par Georges Bonneau, Editions Stock, "Bibliothèque cosmopolite", 1979, p.20.)

ここでは単純に「まれに」が *rarement* で訳されているように見える。単なる誤訳なのだろうか、それとも本稿の主張の決定的反例になるのであろうか。しかしこの例もよく観察してみると、説明の糸口は見つかる。仏語訳(31)の *rarement* の直前にある比較の *plus* がヒントになる。もし単独の *rarement* だけならば違和感があるが、*plus rarement* という訳は直感的に正しいように思われる。この感覚はどこから来るのだろうか。

日本語テキストが単に「まれに」以下の部分だけならば、フランス語訳はおそらく *parfois* や *de temps en temps* の方が適切であろう。しかしよく見てみると、まず「時として」があり、その後に「まれに」が続く。どちらも低い頻度表現であるが、「時として」の方が頻度が高く、「まれに」の方が低いのではないだろうか。その結果、比較のニュアンスが生まれ、しかも「時として」から「まれに」への移行はゼロへと向かう減少方向の段階性を含意す

ることになる。

このニュアンスを正しく捉えているからこそ、フランス語訳は *plus rarement* になっているものと推測される。しかし頻度表現と比較表現との関係についてのさらに踏み込んだ議論などは別項に委ねたい。

注

- 1) René Rivara, “Mais, le *but* anglais et les subordonnées de concession,” *Pragmatique et énonciation*, Publications de l’Université de Provence, 2004, p.95–109. なお、Rivara も前提としているように、*mais* の方向性に関しては Oswald Ducrot の一連の研究が重要である。最も基本的な文献としては次のものを挙げておきたい。J.-Cl. Anscombre et O. Ducrot, “Deux *mais* en français?,” *Lingua* 43, 1977, p.23–40. また本稿の筆者も *mais* の近年の研究について論評を發表したことがあるので参考にされたい。喜田浩平、「「ブロック」理論と「論証」理論」、『フランス語学研究』、第 38 号、2004 年、p.51–57。
- 2) K. KIDA, *Une sémantique non-véritative des énoncés conditionnels : essai de traitement argumentatif*, thèse de doctorat, EHESS, 1998. 喜田浩平、「条件文の意味と使用」、『仏文研究』第 30 号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1999、p.1–18. 喜田浩平、「*si* と *même* の意味論的結合関係」、『フランス語学研究』第 34 号、2000、p.27–38。
- 3) 全ての可能性を検討するならば、X が否定的方向性を持つ場合の「X し か～ない」と、X が肯定的方向性を持つ場合の *ne...que* X のそれぞれが全体としてどのような方向性を持つかを論じる必要がある。しかし前者は具体例を探すのが困難である。一方、後者は結論から言えば全体としては否定的方向性である。従って、フランス語だけに限定するならば、X が肯定的であろうと否定的であろうと *ne...que* X の全体は否定的である、ということになる。